

トップインタビュー

鳥取県立中央病院院長

武田 倬 氏

この人に注目

独立行政法人国立病院機構

米子医療センター院長

濱副 隆一 氏

鳥取で活躍する女性医師

鳥取大学医学部附属病院

内分泌代謝内科(第一内科)

大倉 裕子 氏

来たれ研修医!

鳥取大学

医学部附属病院

病院探訪

智頭町国民健康保険

智頭病院

クローズアップ

鳥取県専門研修医師

支援事業

KLI MI KOS

とっどりの医療

【クリニコス】

春号

2010 spring



このみずみずしさを未来へ

鳥取県



KLINIKOS

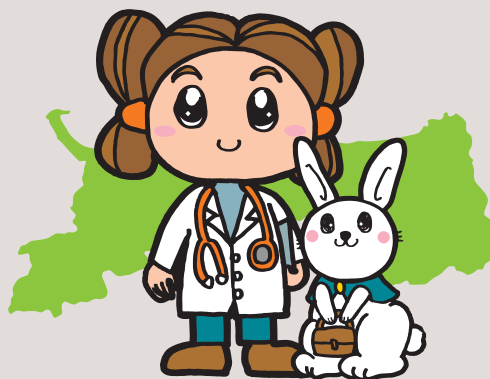
KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部医療政策課



医療の神様
「**大**国主命」と、
神話の地**鳥取県**

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大国主命は、医療の神様とされています。

CONTENTS

トップインタビュー 4

鳥取県立中央病院院長

武田 倬 氏

当院の初期研修修了者が、
 山陰地方で医療に取り組む実績を誇りに。

この人に注目 8

独立行政法人国立病院機構米子医療センター院長

濱副 隆一 氏

鳥取県の腎臓移植を支える
 トップランナーは、地域医療の
 すばらしさを語る人でもあった。

鳥取で活躍する女性医師 11

鳥取大学医学部附属病院内分泌代謝内科(第一内科)

大倉 裕子 氏

教授と同僚に恵まれた幸運で、
 子育てとキャリアを両立できた。
 その幸運が、次の目標を教えてくれた。

来たれ研修医! 14

鳥取大学医学部附属病院

卒後臨床研修センター副センター長／荻野 和秀氏

ロールモデルとなるような
 先輩医師に出会えているからこそ、
 当院での後期研修を選択してくれるのでしょう。

病院探訪 16

智頭町国民健康保険智頭病院

院長／濱崎 尚文氏

“普通の病院”の重要性を理解した者が、
 21世紀の課題——地域医療を担う。

クローズアップ 18

鳥取県専門研修医師支援事業
 —鳥取県の医療向上のために—

小谷 昌広氏

取材先病院MAP



- ① 鳥取県立中央病院 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=78429>
- ② 独立行政法人国立病院機構米子医療センター <http://www.nho-yonago.jp>
- ③ 鳥取大学医学部附属病院 <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp>
- ④ 智頭町国民健康保険智頭病院 <http://www2.town.chizu.tottori.jp/index.htm>

県民に尽くす医療を徹底した結果 病院経営も好転

当院は、長く鳥取県東部の基幹病院の重責を担ってきた医療機関であり、2004年に、鳥取大学医学部附属病院に救命救急センターが開設されるまで、県内で唯一の救命救急センターを持つ病院でした。鳥取大学医学部附属病院と鳥取県立中央病院には、県の東西の柱となつて、先進医療から地域医療までを支えてきたとの自負がありました。人口が全国一少なく、経済的にも豊かとは言えない鳥取県だからといって、医療の乏しい県にしていはいはずはないとの使命感を持ちつづけてきました。

ただ、当院には病院経営が苦戦を強

いられる期間があったのは事実です。皆が、懸命に責務を果たしながらも、医師の増員さえままならず、院内の士気が下がったままになってしまふ。私が副院長として当院に赴任した2001年は、病院が重苦しい雰囲気包まれていました。私は1年間、職員の話に耳を傾け、医療や片山前知事の県政を学びました。

そして私が2002年に院長を拝命し、スタッフに向けて発したメッセージはシンプルなものです。「県民に尽くす医療をやろう」「良い医療をすれば、赤字になるはずはない」。経営は私たちが責任を持つので、現場の医師をはじめとする医療スタッフは良い医療に専心してほしい」とも付け加えました。さらに、診療部長などの現場責任者には具体的な考えを示しました。

「大収益をめざす必要はない。けれども、赤字はいけない。だから、年間収支1円でも黒字をめざそう」と。

私のメッセージを、正面から受け止めて尽くしてくれたスタッフのおかげと、スタッフ増員を英断するなどの県のバックアップもあり、2002年度からは黒字に転換。以来、2008年度まで連続7期の黒字をつづけています。

診療科も順調に増え、現在25科3センターの体制が確立しました。黒字転換以降は、文字どおり病院経営は好転し、医療の質も向上しています。

病院改革に際して重視したのは 経営技術よりも意識改革

すでにご理解いただけたと思います

当院の初期研修修了者が、 山陰地方で医療に 取り組む実績を誇りに。

トップインタビュー

Top Interview

Akira Takeda

鳥取県立中央病院院長

武田 倬 氏



Profile

たけだ・あきら

- 1969年 鳥取大学医学部卒業
鳥取大学にて臨床自主研修
- 1971年 鳥取大学第一内科
- 1979年 鳥取大学第一内科講師
- 1983年 松江赤十字病院
- 1985年 松江赤十字病院内科部長
- 2001年 鳥取県立中央病院副院長
- 2002年 鳥取県立中央病院院長

* 1974年から「小児糖尿病大山サマーキャンプ」を主催

* 1984年から「ヤング糖尿病スプリングキャンプ」を主催

が、病院改革に際し私が重視したのは経営技術よりも院内の意識改革です。内に向きがちだったスタッフの意識を外に向けようと腐心しましたし、患者と医師、双方の医療への認識の一致、人権意識、医療倫理観の向上にも力を注ぎました。

あふれる情報の中で、医療者が「井の中の蛙」であるのは致命的です。医師も看護師も積極的に外と交流し、最新、最先端の情報を得、全国レベルでの、自分の位置を知らなければなりません。学会などへの参加に関しては、医療技術のレベルアップが第一義であるのは当然として、各人の精神的な自信を醸成する場にもなります。私は、特に医師に対して、学会での積極的な発表を促しました。結果、院外での評価を得た医師たちの自信が、次第に院内の雰囲気や「明るく」変えていきました。

些末なことにも思えるかもしれませんが、病院が明るい表情を持つか否かは地域医療の根幹にかかわります。患者さんや、地域の医療機関とのコミュニケーションに大きな影響を与えるからです。

2008年夏に、鳥取市の伝統的な祭りである「しゃんしゃん傘踊り」に県立中央病院の「連」が参加。これは当院新築以来、33年目ではじめてのこ



とでした。当院の連には平井現鳥取県知事も飛び入り参加してくださり、集まった住民からやんやの喝采を浴びました。当院の変革の、象徴的なエピソードだと思っています。

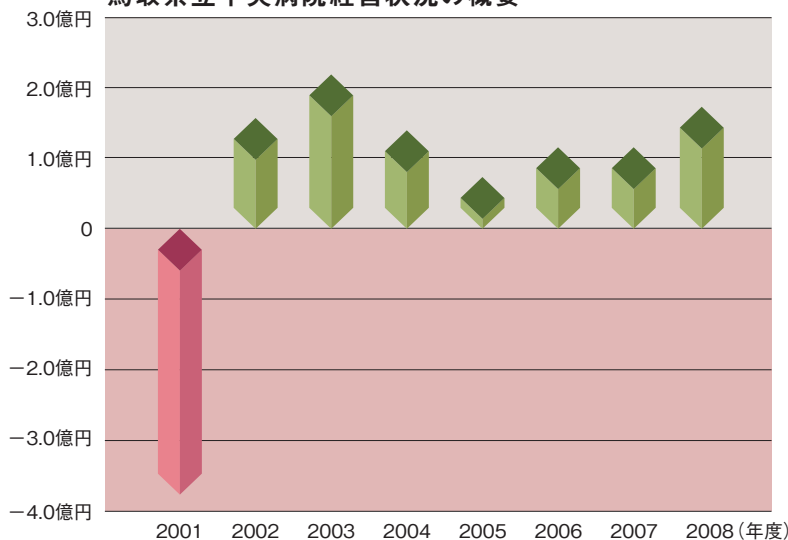
地域住民との交流を体験し 目の輝きを増した研修医が 何人も生まれている

私は鳥取大学医学部を卒業し、第一内科医局に入局。糖尿病の権威である平田幸正教授のもとで学びました。学生時代から地域医療に関心があり、大学医学部には、地域と密接につながって地域医療を担う責務があると考えていました。医局には入りましたが、「臨床がしたいので、基礎研究はしません」と宣言するような生意気な医局員でした（笑）。

私が主催する小児糖尿病患者さんのための「大山サマーキャンプ」は、1974年以来、36年もの長い歴史を刻んでいます。糖尿病は、医師と患者さんだけでは、決して完結しない疾病です。さまざまな分野の医療従事者や福祉、行政、さらには家族まで巻き込み、地域をあげて取り組む糖尿病医療は、今にして思えばチーム医療の先駆けだったと言えます。

そうした体験を通して、地域医療の大切さ、すばらしさを確信している私

鳥取県立中央病院経営状況の概要



は、鳥取県立中央病院の地域医療への取り組みをこれまで以上に強めるべきだと考えています。たとえば、地域医療に欠かせない病院間の連携を模索して、数年前から、鳥取市にある鳥取赤十字病院、鳥取市立病院、鳥取県との間で定期的に院長会議を持っているのも、そのためです。

この会議は、先般来の新型インフルエンザ対策の体制づくりに効果を発揮しましたし、会議を通じて地域の小児科医・産科医不足への対策も具体的にできてきています。

ちなみに、「小児糖尿病大山サマーキャンプ」には、近年、当院や鳥取大学、鳥根大学の研修医の参加が恒例になっています。キャンプは、彼らが地域医療を実体験するには、またとない場。地域住民の方々との交流の体験を経て、目の輝きを増した研修医が何人も生まれているのが印象的です。

指導者の責任を果たそうと 意欲にあふれている 多くの指導医たち

当院には、臨床研修指定病院としての責任感も、もちろん強くあります。7年目以降の、指導医の立場に立つ者たちの意識はとて高く、2009年度、厚生労働省の認定する研修指導医ワークショップの参加者は、指導医対



象者の84%に達しました。卒後研修で何を体験するかが、若い医師の後の医師人生を決めることを、心から理解しているからこそ、指導者の責任を果たそうとの意欲にあふれているのです。

また、前述の2病院及び鳥取生協病院と連携して、診療科のローテーションの選択を可能にする施策を実現しました。さらに初期研修医のためには、専用住居2棟、16室を新築したほか、2009年5月には、NPO法人卒後臨床研修評価機構の認定を中国地区で2番目に取得しています。

我々の熱意に応えるように、当院には情熱あふれる研修医が集まってきてくれています。ここ2年間は、当院で初期研修を受けた医師は、全員が引きつづき山陰地方で医療に取り組んでいます。

私から読者へのメッセージは、「将来、もし当院で臨床研修をすることになったなら、あなたの夢を叶えるために病院のスタッフが丸となって協力しましょう！」ということ。意欲のある方に、意欲に合った内容の濃い医療経験を提供する自信があります。専門領域が何であれ、当院ですごく日々を通して、多くの医療者が、力を合わせて患者さんのために尽くす医療のすばらしさを体験できることを保証します。

月刊で出されている院内報『わかとり』

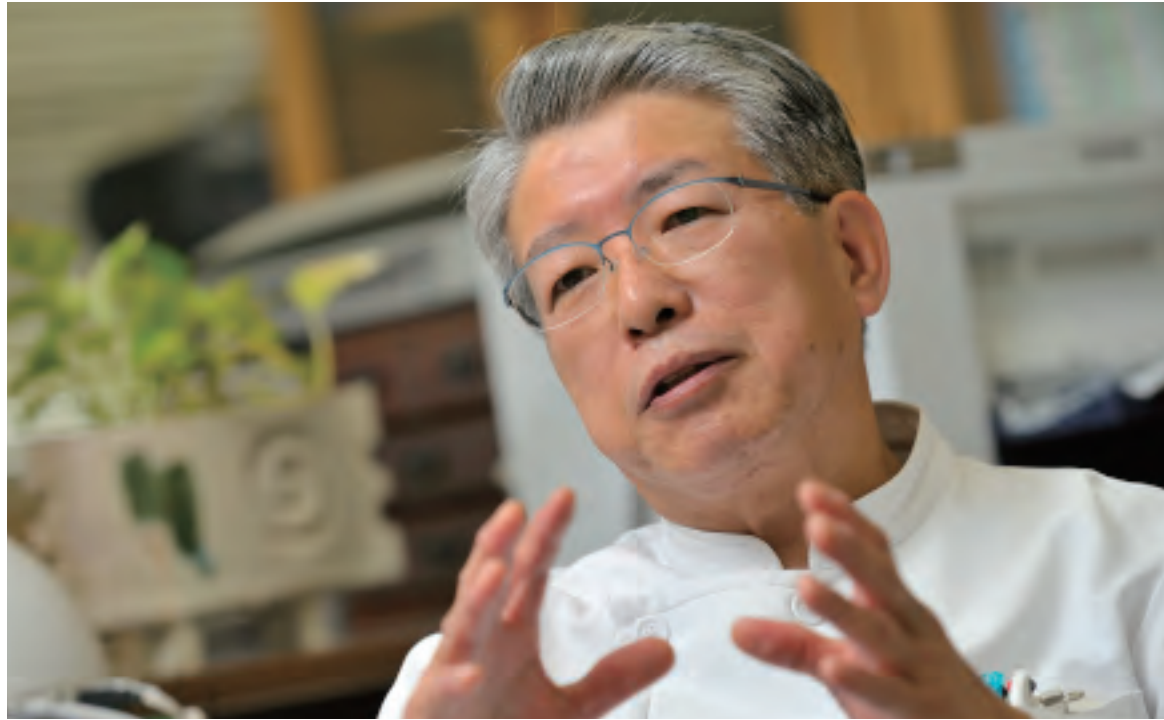


「しゃんしゃん傘踊り」に 病院スタッフが参加



2010年1月15日発行号では「しゃんしゃん傘踊り」に参加した様子が報告されている

この人に 注目



鳥取県の腎臓移植を支える
トップランナーは、
地域医療のすばらしさを
語る人でもあった。

独立行政法人国立病院機構米子医療センター院長

濱副 隆一氏

米子医療センターは、県西部の基幹病院としてがん医療(がん診療連携拠点病院、非血縁者間骨髄移植施設)、長寿医療などに目覚しい功績をあげているが、同時に県内唯一の献腎移植施設指定を受けた施設でもある。2006年11月に、同センターの院長に就任したのが濱副隆一氏。腎臓移植のトップランナーであるとともに、がん治療にも豊富な経験を持つ同氏は、各方面からの期待に見事に応え、院長の重責を果たす。

米子医療センターで1988年から

2008年までに手がけた腎臓移植は、これまで計34例(献腎移植8例、生体間移植26例)。濱副氏は、患者のQOLを劇的に上げる腎臓移植が、そのすばらしい効果に比して、あまりに

も認知度が低いと痛感している。

県人口から換算すれば、全体の腎臓移植数は、全国的にはかなりがんばっていると自負します。ただ、献腎移植は件数的に明らかに苦戦しています。なんとと言っても献腎ドナーが少ない。

ドナー確保については、私たちが独力で

解決できる問題ではないので、行政とのタイアップを堅持しつつ、移植情報センターの設立など、より良い方策を探っているところです。

一方、生体腎移植は順調に症例数を

伸ばしています。特にA B O血液型不適合者間や非血縁者間の移植は、優秀なスタッフとともに前処理の技術を確立し、多くの患者さんを救うことができます。

腎臓移植が抱える最大の課題は、認知が低い点でしょう。一言で言えば、治療のもたらす効用がリアルに理解されていないのです。一般市民の間に浸透していませんし、誤解も多い。

アメリカでは、脳死ドナーがひとり出現すると同時に5人の臓器不全患者が、文字どおり生き返ります。留学を通して実体験した臓器移植のすばらしさと、移植が普通に受け入れられている社会が、私にとって移植医療の原風景であり、モチベーションであると言えるでしょう。さまざまな意見があるとは思いますが、まずは、心臓死ドナーからの腎臓移植が定着することを心から願ってやみません。

現在、県の外科医療を牽引する人物として押しも押されぬ存在である濱副氏だが、本来、抱いていた夢は意外なものだった。

鳥取大学医学部在学中に思い描いた夢は、総合医として医療過疎地域で働くことでした。医療過疎地域で医療に取り組むなら虫垂炎の手術くらいできねばと卒業後に外科に進みましたが、

そこで古賀成昌教授、貝原信明教授、前田迪郎教授（現鳥取県立厚生病院長）といった尊敬すべき指導者に出会い、結局、約20年間で大学医局でございました。

私が初志を脇に置いて大学に残った理由のひとつは、医局の気風にあったのだと思います。指導者は、情熱的で常に私たちといっしょに考え、日本の外科医療、鳥取の医療をより良くする理想に燃えている方ばかりでした。初志は実現しなかったものの、そのような環境下で医師人生を歩め、心から幸福を感じています。

腎臓移植を手がける外科医となることも、鳥取県で医療を行うことも、当初の夢にはなかった展開。想定外の人生活にちょっとだけ戸惑い、戸惑いながらも全力で走った。

生まれ故郷は佐賀県です。大学時代に思い描いていた医療過疎地域での勤務は、半分は故郷をイメージしての選択でした。そんな私が鳥取に根を下ろした理由は、先ほども触れましたが大学医局のすばらしさがひとつと、もうひとつは鳥取という土地への愛着でしょう。

私は、自己紹介に卓球、スキー、ジヨギング、カメラが趣味と書き添える者です。日本海があり、大山、日野川

など雄大な自然に恵まれた鳥取県は、私にはとてつもなく魅力にあふれた土地なのです。

「チャレンジすることが大切だ」
鳥取県の医療の今後に対して、鳥取県で医療に取り組む医師に対して、濱副氏のメッセージは明確。自らチャレンジを実践してきた人物の言葉は、心の奥までにも響く。

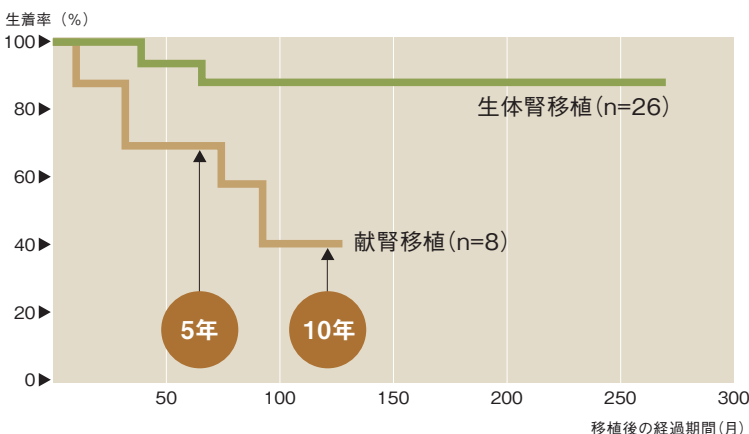
鳥取県は、県全体では人口当たりの医師数が全国平均を上まわっています。が、東部、中部では全国平均に達して

米子医療センターの移植症例

生体腎移植		26例
ABO血液型	適合者間	22例
	不適合者間	4例
続柄	血縁者間	20例
	非血縁者間	6例
献腎移植		8例

2名の腎移植認定医（日本臨床腎移植学会）

米子医療センターの移植腎の生着率



この人に 注目

いません。まず、医師一人ひとりがそのような環境下に身を置いて働いている事実を、しっかりと認識すべきでしょう。

必要なのは、チャレンジ。私は、そう思います。医師の数が限られているなら、一人ひとりがチャレンジし、それぞれに専門性を高める努力がなければ、県の医療レベルを高水準には保てません。

私のウィスコンシン大学への留学は、「絶対に鳥取に移植医療を持ち帰るぞ」との決意をもって臨んだものでした。とにかく必死でしたし、ひとつでも多くの知識や技術を身につけようと懸命に学ぶ日々でした。厳しい時間でしたが、振り返れば、その充実感はとてもようありません。

医師としての充実感は、国内であれば、県内であれ、医局にしようが、診療所に身を置こうが、懸命な努力をすれば得られるはずです。あまつさえそれが、チャレンジして得た成果であれば、何にも代えられない財産にもなるでしょう。さらに、国民や県民の健康と安心に寄与したと実感できたなら、充実感のスケールも違います。

チャレンジしつづけた医師人生の終盤に米子医療センターの運営を任せられる。そこに運命を感じつつ、多くの患



者と多くの後輩医師たちを見つめる濱副先生のまなざしは厳しくも優しい。

私が今、強く心に思っているのは、患者さん目線で医療をする大切さです。また、その延長線上で地域医療の大切さへの思いも深まっています。かつて医療過疎地域で働く夢を持っていた私が、鳥取県西部の地域医療の一大拠点である米子医療センターの運営を任されている。少々の運命と大きな使命を感じます。

経営者として大きな責任を感じるのは、当センターに勤務する医師の皆さん一人ひとりについて。ぜひ、良い仕

Profile

はまぞ え・りゅういち

- 1969年 鳥取大学医学部医学科入学
- 1975年 鳥取大学医学部医学科卒業
鳥取大学医学部附属病院第1外科入局
鳥取大学医学部附属病院医員
鳥取大学助手(外科学第1講座)
- 1982年 鳥取大学助手(外科学第1講座)
- 1984年 医学博士学位授与(鳥取大学)
- 1986年 鳥取大学医学部講師
- 1990年 鳥取大学講師(外科学第1講座)
- 1994年 米国ウィスコンシン大学移植外科臨床研究員
- 1995年 同愛会博愛病院外科部長
鳥取大学非常勤講師併任
- 1996年 同愛会博愛病院副院長
- 1999年 鳥取大学医学部臨床教授
- 2004年 日野病院組合日野病院院長
- 2006年 独立行政法人国立病院機構米子医療センター副院長
独立行政法人国立病院機構米子医療センター院長
- 2008年 鳥取大学医学部臨床教授
- 2009年 鳥取大学非常勤講師併任

事をしてほしい。人生には旬がありま
すし医師人生そのものは、決して長い
ものではない。第一線で活躍できる期
間では、充実した時間をすごしてほし
いと願います。

もちろん願うだけではありません。
選ばれて米子医療センターに採用され
た能力と可能性ある医師の皆さんの力
を、少しでも伸ばし、少しでも良い結
果に導くこと、そして、医師の皆さん
の尽力の結果を経営に反映させ、当セ
ンターを隆盛へと導くことは、院長職
にある私に課せられたもつとも大きな
責務です。

米子医療センターの見学などの
お問い合わせ先

**独立行政法人
国立病院機構米子医療センター**

〒683-8518
鳥取県米子市車尾4-17-1
TEL : 0859-33-7111 (代表) FAX : 0859-34-1580





教授と同僚に恵まれた幸運で、
子育てとキャリアを両立できた。
その幸運が、次の目標を教えてくれた。

鳥取大学医学部附属病院内分泌代謝内科(第一内科)

大倉 裕子氏

Profile

おおくら・ひろこ

- 1995年 鳥取大学医学部医学科卒業
鳥取大学医学部附属病院医員
- 1997年 鳥取大学大学院医学系研究科博士課程入学
- 2001年 鳥取大学大学院医学系研究科博士課程修了
鳥取大学医学部附属病院医員
- 2004年 日本内分泌学会専門医取得
結婚
- 2006年 第1子(長女)出産

鳥取で活躍する
女性医師

Hiroko Ohkura

キャリアを捨てたくない だから、試行錯誤しつつ 子育てとキャリアを両立

一般企業の女性社員が得ている権利で女性医師が手にしていないものはあまりにも多い。特に結婚、出産、育児といった人生の一大イベントをサポートする制度は、医療界全体を見れば、いまだ無に等しいと言っても過言ではないだろう。出産、育児は女性医師にとってはキャリアの終焉の危機を意味する。

大倉氏が、出産を目前にして自らのキャリア形成に関して大きな壁にぶつかったのは、2006年、鳥取大学医学部病態情報内科学（旧第一内科学）講座に入局して10年目のことだった。「子どもを授かったと知ってから周囲を見渡し、愕然としました。子どもを持つ同僚、先輩のほとんどは、出産を機に開業医となったり、働きやすい職場に転職していました。」

子育てをしながら医局に残っている方も、ご両親など子育てを応援してくれる近親者がいてくれて、なんとかなっているとわかった。私の場合は、両親もまだ働いていて、サポートをお願いできる状況ではありませんでした。生まれたばかりの長女を抱っこしながら、今後どうするべきか悩みました。

医局を離れることも考えました」

しかし、結論から言えば、大倉氏は試行錯誤しながら、子育てとキャリアの両立を実現させた。両立のための試行錯誤にチャレンジできたのは、いくつかの偶然のたまものだったと振り返る。

「まず、夫が同じ内科の医局員であったこと。職場の雰囲気や、教授、同僚の気質も知る夫が、『辞める以外にも、道はあるのでは？教授に相談してみては？』と、アドバイスをしてくれました。」

もうひとつは、私のキャリアが10年に達していたことです。10年間仕事をつづけてきて、やはり今の仕事への馴染みや愛着がありました。さらに、やりたいことも見えてきていた。そこで医局に残ることを決めました。もし出産が、入局2年目、3年目のタイミングの出来事であれば、軽々と辞める決断をしていたかもしれません」

完全に辞めてはいけない 復帰をめざすより 細々でも継続が理想

大倉氏が相談をした相手は、内分泌代謝内科を率いる重政千秋教授であった。重政教授は、大倉氏が子育てしながら医局に残る手立てをいっしょになって考えてくれた。



「想像を超えて教授の理解は深く、全面的に協力してくださいました。規定に沿って産前6週まで仕事をし、後に8週の産休。その後の育児期間中における就業規定がまったくない中、職場

復帰後の2年間は育児サポートのスタンスから週2日の外来勤務のみという就業スタイルを認めていただけました。病棟診察には、2009年4月に戻っています。当直、日直に関しては

鳥取で活躍する
女性医師

Hiroko Ohkura

「いまだに免除していただいています」

「厳しくも恵まれた日々をすごし、つくづく実感することがあるという。」

「二度、仕事を完全に辞め、育児が楽になる3〜4年後に復帰しようと考えている方が多いのですが、私の経験からは細々ながらも継続をしたほうがいいと思います。完全に職場を離れて後の復帰の労力は、私のケースとはくらべようもなくたいへんでしょう。」

「でも、条件が許せば子育てを重視したほうがいいと思います。子どもが2〜3歳になるまでの時期は、子どもにとっても、親にとっても大切な時間になるはずですよ。その後の職場復帰もスムーズに迎えられるでしょう」

教授を良き相談相手に、大倉氏は実質的に「育児サポートのための復帰プログラム」を構築した。いかに、教授の同意のうえとはいえ、院内規定にな

い仕組みをこれから考案し、実施する努力、そして待ち受ける障害は並大抵ではなかったはず。しかし、大倉氏は、稀に見る幸運の持ち主だったようだ。

「ひとえに、同僚医局員たちの理解と応援があつて、今の私がいるのです。」

私が休むということ、何かの仕事を免除されるということは、誰かがその穴を埋めてくれるから可能になる。前例のない就業スタイルを受け入れ、サポートしてくれた皆さんに感謝の念は堪えません」

「辞めて当然」から「辞めないのが当然」の時代の橋渡し役に

大倉氏には理解ある教授に相談できた幸運、同僚から支援を得られた幸運があつた。だが、それは、まさに幸運であり、多くのケースでは、同様にものごとが進むとは考えられない。大倉氏には、自らの幸運を痛感しつつ、タイトロープを渡りきった安堵感を感じると同時に、子育てが女性医師のキャリア形成に決定的な障害になる環境への疑問が湧いてきた。

「偶然と幸運がなければ育児とキャリアが両立できないなんて、そもそもおかしいのでは？ 私たちの世代以前は子どもができたから『去る』のが当然でした。けれども、女性医師の増加と医師不足を背景に、将来的には、女性医師が育児を理由に辞めたり、転職するなどありえない常識が根づいていくでしょう。医療界の意識の変化は、メディアを通して、日常の皮膚感覚からもよくわかります。」

私は、ちょうど中間の世代で、『辞めて当然』から『辞めないのが当然』の時代の橋渡し役を担っているのではないかと感じます。そうした思いをたずさえて、今、自分の子育て経験を意識的に情報発信し、早急に院内に復帰プ

ログラムが制定されるよう活動を始めています」

先日には、すぐれたプログラムで20名以上の女性医師の職場復帰をサポートしている岡山大学病院キャリアセンターを見学し、保育所の視察もした。「鳥取大学から、行ってみたいかと打診されていた見学でした。全国的な評判を得ている活動だけに、たいへん勉強になりました。」

特別な役割があるわけでも、発表の場が用意されているわけでもありませんが、与えていただいた機会に得た見聞をしっかりと心にとめて、求められれば適確に意見を述べていきたい。

次世代の女性医師のために、院内制度の整備に貢献できれば、うれしい限りです」

医師の職場環境を改善すべきとの声は年々大きくなっており、医療界全体が改善活動に動き出している。特に女性医師にとっての環境は、物理的にも制度的にも整備がたち遅れている。ワーク・ライフ・バランス——大倉氏は、最近、注目されている視点が医療界に認知されるはるか以前に、出産、育児をしながら大学医局に籍を置きキャリアを積んできた人。制度も概念もない中で孤軍奮闘した経験談は、未来を担う女性医師にさまざまな教訓を与えてくれる。



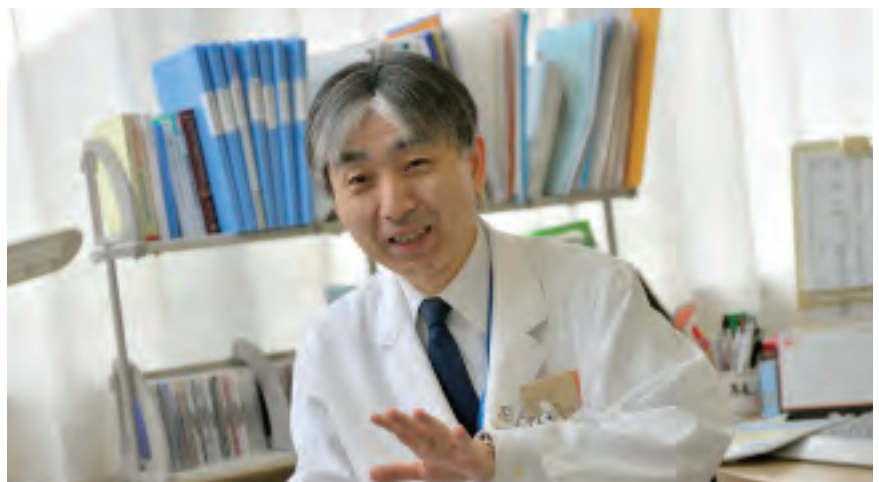
来たれ
研修医!

鳥取大学医学部附属病院

明治年間に鳥取県立病院米子支部病院として誕生して以来、
鳥取県の医療を担った100年余の歴史を持つ鳥取大学医学部附属病院。

現在は大学病院の使命とも言える先進医療を牽引すると同時に、
地域医療を支える屋台骨としての役割も果たす。

病院のありようは、そのまま卒後臨床研修環境にも反映されており、「最先端医療から地域医療まで」、
熱意さえあれば学べることは実に幅広い。



Q 貴院の初期研修の特徴からお聞かせください。

大学附属病院である利点を最大限に生かしています。

利点とはまず、レベルの高い指導医が数多く在籍する点。さらに、医療機器はもとより、たとえばシミュレーターなどの教育機材も含め、ハード面が充実されている点です。

ロールモデルとなるような
先輩医師に出会えているからこそ、
当院での後期研修を
選択してくれるのでしよう。

卒後臨床研修センター副センター長

荻野 和秀氏

Q 指導医が十分にそろっているのは、研修医にとって心強いでしょうか。もしかして、マンツーマンで

はい、当院ではマンツーマンの指導体制をとっています。また、基本はマンツーマンですが、診療科ごとにさらに厚い指導ができるよう工夫もしています。

内科では、指導内容が指導医の専門科に偏るのを防ぐ目的で、サブ指導医もつく複数の指導医体制を取り入れています。

救急では、医療内容の特性上、必然的にそうなるわけですが、全指導医が全研修医を指導する体制です。到達目標をクリアするために、さらに多くの指導医をつけるなどの施策は診療科ごとの判断に任せています。

Q ほかに卒後研修に関して、アピールポイントはありますか。

当院は、大学病院の中でも早くから海外との交流、連携を始めています。2006年からは毎年、アメリカ/コロンビア大学から指導医を招き、短期間ですが、研修医たちが直接、指導を受けられるプログラムが稼働しています。そのプログラムが縁となり、当院の研修医がコロンビア大学・メデイカルセンターの臨床研修を現地見学するプログラムも誕生しました。

Q 一般的に大学病院は科ごとの縦割り社会の様相が強く、卒後研修プログラムが脆弱であるとの見方があります。貴院の取り組み姿勢や実際に構築しているプログラムを拝見すると、必ずしもそうではな

いのだと痛感させられます。

初期臨床研修が必修化されると決ま
つてからの当院の動きは、全国的に見
ても早かったと自認しています。制度
が導入された2004年度の、少なく
とも2年前にはプログラム構築に取り
かかっていますし、同時に学生に向け
た啓発活動もスタートさせました。

努力の甲斐あって、新医師臨床研修
制度実施の初年度にはフルマッチを果
たすとともに、プログラムは、大学病
院の臨床研修プログラムの中で特色あ
るプログラムの全国トップ5のランキ
ングに入る評価をいただきました。

Q 以後、継続してフルマッチをつづ
けている？



残念ながら、そうはいきませんでし
た。他院のプログラムも進歩していま
すし、学生の意識や志向も年とともに
変わりますから。しかし、さまざま
変化を跳ね除けて研修医に希望される
研修病院になるよう、毎年、プログラ
ムを更新するなど、関係者一同、力を
尽くしています。

Q 旧国立大学の附属病院としては、
かなり進んだ思想と取り組みは、
どこから生まれるのでしょうか。

まず、鳥取大学医学部の気風がペー
スにあると感じます。そのうえで、附
属病院の経営、運営にたずさわってこ
られた歴代の病院長をはじめとする病
院執行部の皆さん方の、努力の積み重
ねが息づいているのでしょう。少なく
とも私の知る限り、当院の執行部は卒
後研修の重要性をしっかりと認識して
おり、予算に限りがあるにもかかわらず
医師教育の分野へのサポートを惜しみ
ません。卒後臨床研修センター長であ
る小川敏英教授が、附属病院の副院長
を兼任している点をとっても、病院長
を中心とする病院執行部の意識がわか
るはずです。

Q 初期研修から引きつづき後期研修
の場に貴院を選ぶ研修医の割合が

約8割とうかがっています。これ
は、とても高い数値です。秘訣の
ようなものがあるのでしょうか。

いちばんは、間違いなく指導医の熟
意ですね。初期研修に入る時点で多く
の研修医は、めざす診療科が決まっ
ていません。彼らがたった2年で、「こ
れ」という進路を当院で見出している
のは、すべて指導医の功績。ロールモ
デルとなるような先輩医師に出会えて
いるからこそ、当院での後期研修を選
択してくれるのでしょう。

Q 初期研修の場でロールモデルを見
出せるか否かは、医師人生を左右
する大事だと思えます。

ご指摘のとおりだと思います。です
から、私も研修医に向けて、早く自分
の10年後、20年後をイメージできるロ
ールモデルを見つけるようにメッセー
ジを送っています。当院には必ず目標
とすべき人物がいるはずだからと。

Q 厳しい研修の場に身を置く研修医
へのケアも欠かせない時代になっ
ているようですが。

2005年からメンター制度を導入
し、メンター1名に研修医3名の体制

で2年間を見守ることとしています。
疑問や悩みがあれば、いつでもメンタ
ーに相談できる。相談の中身は絶対に
外に漏れず、彼らの声に沿って、必要
な対策や制度変更を講じる必要があ
れば、研修センターの判断で速やかに実
行されます。

メンターに特段の相談がなくとも、
年3回は面接する仕組みになっていま
すし、チェックシートによる自己スト
レスチェックも、定期的に行っていま
す。研修医の心の健康には細心の注意
を払っています。

Q 最後に、求める「研修医像」を教
えてください。

面白味のない答えでしようが、やる
気のある方を求めます。突き詰めれば
研修医に求めるのはその一点です。い
かにすばらしい施設で、すばらしいプ
ログラムで研修しようと、当人にやる
気がなければ実のある研修にはならな
いでしよう。

さらに言えば、プロフェッショナルリ
ズムへの憧憬や共感のある方は、持つ
べき「やる気」への理解も早いように
感じます。より早く、より大きな「プ
ロの誇り」を身につけたい。そのよう
な志向を持った方に、大きな可能性を
感じます。

普通の病院の重要性を理解した者が、21世紀の課題——地域医療を担う。



智頭町国民健康保険智頭病院院長の瀨崎尚文氏

■八頭郡智頭町、JR因美線の駅と智頭急行の始発駅が併設される智頭駅から徒歩5分、プラットフォームから視認できる距離の小高い丘の上に建つモダンな5階建ての施設。2005年にオープンした智頭町保健・医療・福祉総合センター「ほのぼの」の中核的

存在が、智頭病院である。院長の瀨崎尚文氏は1997年に内科医、副院長として同院に赴任し、2007年に同院長に就任。智頭町の医療に取り組んで13年目の今を、感慨深げに次のように語ってくれた。「地域医療は、地域に受け入れられてこそ成立するもの。したがって、地域医療をする者は地域に受け入れられるところから始めなければならないとの覚悟を持って当地に赴きましたが、実際、受け入れられるには7、8年の時間を要しました。今は、町に溶け込んでいると自信を持って言えます」

町が受け入れた人物は、地域医療に情熱を持ち、理想の地域医療を実現するために発言し、行動する人だった。智頭町保健センター、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター及び学校給食センターと智頭病院が1カ所に集まった先進的施設「ほのぼの」も、瀨崎氏があたためていた基本構想をベースに生まれたものである。

■「前病院は、私の赴任時にすでに老朽化が激しく、建て替えの必要性が語られていました。せっかく予算を組んで建て替えるなら病院単独ではいけない——私の意見は、すぐにまとまりました。過疎化と高齢化が進んだ町には、資金的効率からも、サービスの効率から、保健医療福祉総合センターのようなものがふさわしい。関係者にそう具申すると同時に、智頭町の福祉課と社会福祉協議会に声をかけ、旧病院内に部屋を準備し、医療者と福祉関係者が同じベースキャンプで仕事をする体制をつくりました」

瀨崎氏の声がかげでできた別組織の共同作業の枠組みは、実質的な「ほのぼの」設立に向けた準備委員会となる。「大それた」とまでは言わないけれども、医師が単独で発案し行動するには、少々スケールが壮大すぎるようにも思えるが——。

「多くの人は、地域医療を場所の概念でとらえがちですが、間違っています。地域医療とは、地域住民の健康を守る概念で、健診も含めた医療はもちろん、保健、介護などの福祉をトータルにカバーして住民の健康を支えることを意味します。そのような本質さえつかんでいれば『ほのぼの』につながる発想は、自然に出てくるはずですよ」

病院探訪

智頭町国民健康保険 智頭病院

智頭町国民健康保険智頭病院（以下、智頭病院）院長の瀨崎尚文氏は、確信に満ちた表情で言った。「先進医療や高度医療のみが医師のプロフェッショナルリズムの象徴である時代は、終わる」。いまだに「地域医療は、医療の『端っこ』」などと口にする医学生もいるが、「いずれ医療がカバーする大きな山の名は、コミュニティ、つまり『地域』になるでしょう」と穏やかに話すのだった。

■ 濱崎氏の構想は、今、徐々に、順を追ってかたちになりつつあるという。たとえば、在宅医療。在宅ケアにたずさわる医師や看護師に加えて、デイサービス、ショートステイなどをサポートするヘルパーたちが参加するグループミーティングが、週に1回定期開催されている。

また、地域住民を主な対象にした「ほのぼの出前講座」は、無償で不定期に開催される健康増進、疾病予防の啓発イベントで、「ほのぼの」に在籍する各分野の職員が力を合わせて推進している。今後も、保健・医療・福祉総合センターを舞台に、行政区分にとらわれないコラボレーションが次々に生まれることだろう。

ところで、総合センターの医療分野を担う智頭病院は、どんな病院なのか。「そうですね、一言で申し上げれば『地域住民とともにまちづくりをする病院』と説明できると思います。医療の中心に興味を持つ方には、『コモン・ディシーズのプロの集団』と解説しています」

事前資料からは、糖尿病、消化器・神経・循環器疾患を対象とした内科、変形性疾患を得意とする整形外科、そして新型インフルエンザ騒ぎの中、全国でもっとも早いワクチン集団接種を

リードしたことで注目される小児科などがあると思われる。それらすべての科を貫いて流れる理念が、「コモン・ディシーズのプロの集団」なのだ。

「住民が罹患する疾病のほとんどは、ありふれたものです。ありふれた疾病を普通に診察し、治療する。一見、造作もない医療に思われるでしょうが、時代の標準的な医療を提供するには、時代遅れであってはならないだけでなく、無闇に最先端であるのも間違い。

次世代の医師教育は、現場を見せ、実践させ、ともに考える教育とすべき。

そこには、高度なプロフェッショナルリズムが求められます。

ですから、どんな病院づくりをめざすかと問われれば、私のチャレンジ精神を理解していただく意味を込めて、『普通の病気を普通に治す普通の病院をめざします』と申し上げています」

■ 2008年度には鳥取大学病態情報内科学教室との連携を築き、クリニカル・クラッシュにおける地域医療

体験希望者を受け入れている。

「研修後の彼らのレポートを読むにつけ、時代が変わりつつあるのを確信します。地域医療の実際に触れ、皆、心から感動してくれる。『こうだったことを医学部でも教えてほしい』と記したのもありました。

つくづく感じます、もう地域医療は理念を語る局面を終えた。次世代の医師教育は、現場を見せ、実践させ、ともに考える教育とすべきでしょう。当院には、その一翼を担う気持ちがありますし、私自身も勉強会などに出かけ医師教育への造詣を深めていく決意を固めています」

理論家であり、実践者であり、地域医療の魅力に心奪われた信者でもある濱崎氏の薫陶を得た若き医師たちが、鳥取の、全国の地域に根づいていく日はそう遠いことではなさそうだと。



病院の一角には座って待てない患者のための畳が敷かれたスペースがある



智頭町は杉の名産地。地元の杉を使ったブラインドのある病室

智頭町国民健康保険智頭病院の
見学などのお問い合わせ先

智頭町国民健康保険智頭病院

〒689-1402

鳥取県智頭町智頭1875

TEL : 0858-75-3211 / FAX : 0858-75-3636



鳥取県専門研修医師 支援事業

—鳥取県の医療向上のために—

鳥取県の医療を向上させるには地元で働く医師の研修、育成に適した環境の整備が不可欠である
—こうしたテーマのもと鳥取県では『鳥取県専門研修医師支援事業』が始まった。

医師を県外の病院に研修派遣し、帰郷後、県の医療の質向上に
修得した技術を生かしてもらうことを目的とした事業だ。

今回、この事業の第1号の研修医師となった小谷昌広氏のお話をうかがう機会を得た。

小谷氏は鳥取大学医学部附属病院及び関連病院で10年の臨床経験を積んだ後、
新たなステップに上がるため同事業に応募したと話す。

教える立場になったときに 気づいた経験不足がきっかけ

支援事業への応募のきっかけは、小谷氏が勤務していた鳥取大学医学部附属病院呼吸器内科科長のすすめだったという。

「私は呼吸器内科で主に肺がんを診てきましたが、いざ教える立場になったとき、自分の経験の浅さを痛感しました。やはり、あらゆるがん種に対する抗がん剤治療を経験していないと、十分な指導はできません。そして、国立がんセンターの短期レジデントへの応募を考え始めたころ、支援事業への応募をすすめられたのです。

この事業の特徴は、分野は県に必要とされる範囲に限られるものの、具体的な研修内容、研修先は医師自身が申告できるところ。おかげで、自分にとって最高の研修を受けさせていただいていると感じています」

ステップアップをめざす医師にとって支援事業のフレキシブルなシステムは、とても有意義に機能しているようだ。

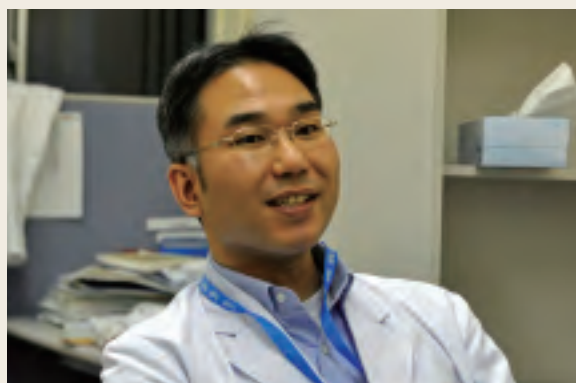
地元病院で勤務をしてからでも 専門性を高めるのは遅くない

小谷氏の研修プログラムは、2009年4月から国立がんセンター中央病院で6ヵ月、つづいて聖マリアンナ医科大学病院に移り、さらに6ヵ月の研修を受けるというもの。「まず、国立がんセンター中央病院では、

乳腺、血液、婦人科など多領域にわたるがん薬物治療にたずさわり、希望どおりさまざまな抗がん剤を扱えました。研修の成果は予想以上で、先日、がん薬物治療専門医試験も無事、受験することができ、今はその結果を待っているところです。

現在、籍を置く聖マリアンナ医科大学では、気管支鏡を用いた診断と治療について学んでいます。具体的には超音波内視鏡及びナビゲーションを用いた肺生検など各種検査や、硬性気管支鏡を用いたステント留置術などの貴重な経験を積んでいます」

支援事業を有効に利用して自らのステップアップを遂げつつ、地元の医療への貢献を志す小谷氏の姿は、鳥取県内の多くの高い志を持つ医師にとって心強い前例に違いない。



小谷昌広氏

「専門性を高めたいと考える医師は多いと思いますが、それを始めるタイミングは人それぞれ。最初から都会の有名病院を選んで専門を学ぶ道もありますが、地元の病院で勤務をしてからでも決して遅くありませんし、むしろ基礎がしっかりしている分、近道だとも言えます。そうした意味で、この事業の意義は大きいですね」

支援事業はまだ始まったばかりだが、将来の鳥取県の医療を担う医師がここから生まれることが大いに期待される。

鳥取県専門研修医師支援事業の概要

目的	医師の研修、育成に適した環境を整え、県内の医師不足解消につなげる 鳥取県内の医療の質的な向上をめざす
対象	医師免許取得後おおむね5～10年程度の医師
研修期間	半年～2年
条件	研修後、研修期間の2倍に相当する期間、鳥取県内の医療機関に勤務すること
身分	県職員
お問い合わせ先	鳥取県福祉保健部医療政策課医師確保推進室
TEL	0857-26-7195
E-mail	iryouseisaku@pref.tottori.jp

『KLINIKOS』春号の 編集を終えて

『KLINIKOS』冬号、春号の制作のために、鳥取県内を動きまわり、多くの医療関係者に取材をさせていただきました。制作スタッフの多くは、東京を拠点に活動する者たちです。東京にはほとんどの医療情報が集まり、国内の医療事情は把握できていると思っていましたが、今回の取材では目を見開かされることばかりでした。

鳥取の地で活動する医師の皆さんのお話は、どれもこれも深く胸に刻まれています。医療は東京や大阪、あるいは有名大学医学部だけにあるわけではない。頭ではそうわかっているつもりでしたが、やはりどこかに偏重した認識があったようです。知らないこと、思っていたことばかりでした。

鳥取で先進医療に取り組む方、鳥取で地域医療に取り組む方、鳥取でほかにはない医療を切り拓く方、鳥取の医療の未来を考えつづける方——それらの医師の方々へのインタビューから鳥取県の医療のポテンシャルと魅力が鮮明に浮かんできました。とても貴重な体験をさせていただけたと、取材にご協力いただいた皆さんに心から感謝しています。

特に医師をめざそうとしている方、若い医師の皆さんには、ぜひそんな鳥取の医療の横顔に目を向けていただきたいと思います。将来、自分の医療を展開する場が鳥取でなかったとしても、鳥取での医療経験は、必ずあなたの医師人生を支える基礎体力になるでしょう。

制作スタッフ一同

STAFF

発行	鳥取県福祉保健部医療政策課 (http://www.pref.tottori.lg.jp)
編集制作	株式会社メディカル・プリンシプル社 (http://www.medical-principle.co.jp)
編集協力	株式会社カレット (http://www.care-t.co.jp)
編集長	中村敬彦
副編集長	及川佐知枝
制作コーディネーター	杉浦美奈子
ライター	清水洋一
カメラマン	木内博
アートディレクター	鈴木道雄

KLINIKOS
ととりの医療
春号
2010 spring

鳥取県の医療を支える医師を支援します。

鳥取県医師登録・派遣システム(鳥取県ドクターバンク)

地域医療に携わりながら、医師のキャリア形成を図ります

地域医療ローテーションコース

本人の希望等(キャリアビジョン)により、長期の派遣等の計画を策定して自治体立病院等への派遣を行います。

- 派遣等計画には、県立病院、鳥取大学医学部における研修期間を設定することができます。
- 派遣先、派遣計画期間の終期などは相談に応じます。

子育て等で現場を離れた医師の復帰を支援します

子育て離職医師等復帰支援コース

子育てなどにより現場を離れた医師を対象に、現場復帰のための研修を県立病院、鳥取大学医学部附属病院などで行います。

- 本人の希望等により勤務時間、勤務日数等を調整します。(この場合は非常勤採用となります)
- 研修期間は最大で1年間です。(相談に応じます)

県内医療機関の求人を紹介します

無料職業紹介コース

県庁内に「無料職業紹介所」を設置し、鳥取県内の医療機関からの求人情報の提供及びこれらの医療機関への就業のあっせん、紹介を行います。

- 無料職業紹介の場合は、各医療機関が直接雇用することとなり、県職員の身分は付与されません。
- 採用の可否は求人医療機関が面接等により決定します。また、給与等の勤務条件は各医療機関規定のものとなります。

鳥取県専門研修医師支援事業

県外の医療機関で研修を行い、その成果を県内で活かしていただく医師を支援します。

鳥取県ドクターバンクの定員枠を利用し、県職員(知事部局常勤)として採用し、県外病院に対して研修派遣(6か月～2年)を行います。

- 研修後、鳥取県の医療に貢献しようとする医師(医師免許取得後おおむね5～10年目程度)であれば、出身地、出身大学等は問いません。ただし、臨床医に限ります。
- 研修先医療機関は、日本国内に所在するものに限りです。(詳細な研修内容は、選考時にプレゼンテーションしていただきます)
- 研修修了後は、県内医療機関で研修期間の2倍に相当する期間の勤務を求め、習得技術の県内医療への還元、県内の若手医師の指導等に当たっていただくことを求めます。(採用時に県内勤務を定める「誓約書」を提出いただきます)

鳥取県医師海外留学資金貸付金

海外の医療機関で研修を行い、その成果を県内で伝達していただく医師を支援します。

海外において国内では修得することが難しい診療に係る知識や技術を修得する研修を受ける者で、留学終了後、知事が指定する県内の病院に勤務し、修得した知識または技術を伝達しようとする者に対し、留学に必要な資金を貸し付けます。

- 借受者の資格/医師免許取得後5～15年目以内の医師で専門医資格を有する者または自治医科大学を卒業した者。
- 貸付金額/留学における研修経費月額30万円及び渡航経費。(帰国に要する経費を含むものとし、100万円を限度とする)
- 貸付期間/留学研修を始める日の属する月から留学研修を終える日の属する月まで。(6月以上、24月以内)
- 貸付利率等/無利子(連帯保証人、保証人が各1名必要)
- 返還免除条件/留学研修を終了した日から3月以内に知事が指定する病院において常勤医師としての勤務を開始し、貸付金の貸与を受けた期間の2倍に相当する期間以上を当該病院において業務に従事し、かつ、勤務開始日から1年以内に留学研修で得た成果を伝達する講習会を県内において開催すること。(全額免除)

詳しい条件等は鳥取県ホームページ (<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>) をご確認ください。



このみずみずしさを未来へ

■お問い合わせ先 **鳥取県庁福祉保健部医療政策課医師確保推進室**

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：iryouseisaku@pref.tottori.jp